



Iwamura Kazuo

岩村 和夫

武蔵工業大学環境情報学部・(株)岩村アトリエ

メモとスケッチ

人はなんのためにメモやスケッチを残すのだろうか。これまで、そんな問いにまともに答えようとしたことがなかった。少なくとも建築デザインの場合、絵画や彫刻のように個人の資質やアイデアだけで物事は進んでいかない。だから批判や議論に晒されるプロセスを通して、多くの人を説得できるようなイデーの言語化、可視化、実体化が必要なのだ。通常それには時間がかかるから、その時の流れのなかで建築家はメモやスケッチを書いては捨て、捨てては書き、そして残す。

記憶のメカニズム

ところで、視神経から得られた視覚情報は脳の中の海馬を介して形、色、動き等に分解され、時や状況のインデックス情報を付けられて、大脳や小脳の脳細胞にバラバラに蓄積される。そして、必要な時にインデックスの一部を頼りに再びそれらが統合され、鮮やかなあるいはおぼろげな記憶としてよみがえる。その過程では神経細胞を走る電気信号等による伝達の強弱がその記憶の速度と確実性を決定する。その仕組みは驚くほど精緻だ。

現代の私たちは、同様なメカニズムの一部をコンピュータによって一見外部化できるようになった。しかし、メモやスケッチは、こうした記憶の再構築のプロセスにおける確実性を、小脳の運動調節機能を介して腕や手や指を動かすことで情報を外部化し、強化する行為に他ならない。この五感が介在する脳と体のメカニズム自体を外部化することはできない。

忘却の効用

私の場合、このメモやスケッチの媒体や描き方を特に決めている訳ではない。その対象が人の言葉であったり、文章であったり、空間であったり、モノであったり、概念であったり、映像であったりするからだ。その先に統合化された建築のイメージがある。その際、メモやスケッチで記録を残すと同時に、忘れることの大切さを再認識すべき



1948年 神戸生まれ。1973年 早稲田大学大学院理工学研究科修了。～1974 仏政府外務省給費技術交流生。～1976 G. Candilis 事務所(パリ)。～1980 AG5(ダルトムシュタット)。1980～ 岩村アトリエ(東京)。1997～ 武蔵工業大学環境情報学部教授。所属: 日本建築家協会(理事、国際委員会委員長)、国際建築家連合(理事)、日本建築学会(地球環境委員会幹事)他。受賞: 2003 World Habitat Award、2003年 日本建築学会(業績)賞他

だ。たとえば、程度の差こそあれ過去に体験した極度な苦痛や恐怖という感覚をヒトは忘れることができる、と教えてくれたのは社会文化精神学者の野田正彰である。そうでなければヒトは生きていけない。一方美化された甘美な思い出は残る。デザインすることも適度に忘れることである。建築の創造や構築はこの働きに基づいている。その時、瞬時の決断が要求される。その取捨選択のスピードによってメモやスケッチが活かされる。

メモの違和感

しかし、メモやスケッチをしていて時に釈然としないことがある。誰を意識して記録しているのかという問いが頭をよぎる瞬間である。もちろん一義的には自分自身のための備忘録だ。そうでありながら、いつかどこかで他人に見られることを意識している。このプロセスが大切だから残しておくという理性的な意思と、自分の脳の働きを助けるメモやスケッチを見られることへの予感的な意識との違和感。過去の自分(心の動き)を想起される状況とともに見つめるときのひどく私小説的な甘美な感覚と、それを露出するときに味わう不思議な快感への予感。建築に限らず、表現芸術について回る性である。

ここに示した私のスケッチは、20年以上経ってそうした違和感から解放されたものの一部である。つまり人に見られることをいとわないスケッチのコラージュである。その場面や状況は時を超えて今なお活き活きと蘇る。そして当時よりもはるかに多くを語ることができる。そのふくらみが今の仕事に確実に反映されている。

その後も、日々膨大な量のメモやスケッチを描き、捨て、残してきた。そんな紙の山が散乱するアトリエの仕事場で、あらためてそんなことを考えてみた。

